

45

日本で最初の西洋式病院 長崎養生所の男性看病人

平尾真智子

健康科学大学

1. はじめに

幕府の依頼に対しオランダ人軍医ポンペが1857年にヤパン号で来日、5年間医学教育を行い、1862年11月帰国した。彼は出島に住み海軍伝習所のなかの医学伝習所で医学教育を実施。ユトレヒト陸軍軍医学校(1875年廃校、軍医学校は19世紀のみ存在)の出身である。オランダ側としてはジャワすでに現地人のための医学校を開設しており、長崎が2つ目の医学校となる。第1回医学伝習生は14名であった。ポンペは、病院設立の建白書を幕府に提出し、許可された。病院は長崎市内の小島郷に1861年9月20日開院した。医学伝習所も市内大村町からここに移転した。本研究では長崎養生所関連資料から日本で最初の西洋式病院における看護人について考察する。

2. 長崎養生所の概要

養生所の場所は小島郷で、小高い山の中腹にあり、風通し・採光良好。海岸の平地からはかなり急な坂を上る。設計はトローエン海軍中尉で、日本人大工が建てた。ミアズマ説に立脚した設計である。建物はH字形、2階建2棟(写真あり)で、8病室あり、各室15ベッドで合計120床。のちに小病室に特別用病床が4つ追加となり124床となる。病室以外に隔離患者室、手術室(4室)、薬品・機器・書籍備付室(1室)、浴室、料理室、当直室、看護室、運動室が設置された。入院料は2メキシコドルで治療費、食費、看護料を含んでいた。

3. 養生所の男性看病人

長崎奉行によって公布された達によると「医薬は勿論看病人相撰」とあり、看病人による看病も重視していた。1861年9月5日付で8項目の「養生所規則」が発布された。この規則には「看病人」が2項目に書かれ、患者が連れてくる看病人と、養生所を案内するなどの仕事をした病院の看病人がいた。当初14名であった医学伝習生は40人となり、ポンペに従い回診を行い、聴診器の使い方や診断・治療、死体を用いた手術練習の他に、3ヶ月交代で臨床実習として、包帯実習、薬品の調合、食事及び浴室の監視、種痘に関する記載、病床記録及び日誌の保管等を行った(『ポンペ日本滞在看聞記』)。医学伝習生の橋本綱常は2代目教師ボードウィンが紙型人体模型を使って講義をしたときには、塾を去り、病院の看護室すなわち看護人の部屋に住居した。それはこの紙型模型を自由に見たかったため、そのために窮屈な看護人部屋に同居したのである(『橋本左内言行録』より、橋本綱常伝)。このことから看護人は男性であることがわかる。

ポンペの本国への書簡(1859.8.3)のなかに、長崎でのコレラ流行に際し、献身的な働きをした海軍派遣隊の看護兵G.インデルマウルのことが記されている。彼は1857年2月6日ロッテルダムで3年契約の看護兵として雇われた。1857年3月26日、ヤパン号に派遣され第二次海軍派遣隊のカットンディーケ、ポンペらの一行に少し遅れて、1857年9月21日に来朝した。同年11月1日より1859年12月1日までの2年間、出島に滞在した。当時26歳であった(宮永孝『ポンペ』)。オランダの軍隊組織には軍医だけでなく看護兵もおり軍医を補佐した。ポンペの学んだユトレヒト陸軍病院は軍病院であるため、看護は男性(看護兵、衛生兵、軍医学生)が行っていた。

4. 考察

日本で最初の西洋式病院における看護は医学伝習所に学ぶ医学伝習生によって行われた。つまり、看護人は医学的知識・技術を学習中の伝習生で男性であり、管理を主とする看護に交代で従事した。長崎の西洋式病院で医療を学んだ伝習生たちは、病院すなわち、医療の実践には看護の役割を担当する人員が必要とされることを認識した。彼らは医師となってから、その後設立された各地の病院(野戦病院を含む)に看護の役割を伝えた。その結果、さまざまな形の看護担当者が出現した。幕末から明治初期の病院では男性の看護人が一般的であった。